

Member's Forum

会員投稿の頁



U-35委員会企画

「設計者のしごと」

—組織で働くU-35世代と建築—

活動報告

アートアンドアーキテクトフェスタ主催「U-35 Under35 Architects exhibition 2017」の関連イベントとして、U-35のこれまでの活動を紹介します。展示企画と、「設計者のしごと」と題したトーク企画を行いました。

U-35委員会ホームページ

HPを開設しました。

新着情報や過去の活動報告もご覧になれますので、ぜひ一度お立ち寄りください。

<http://www.aaj.or.jp/u35>

U-35委員会Facebookページ

活動内容やメンバーの雑感などざっくばらんに情報をアップしています。

<https://www.facebook.com/U35.aaj>

2017年10月29日(日)、アートアンドアーキテクトフェスタ(AAF)が主催する「U-35 Under35 Architects exhibition 2017」の関連イベントとして、2016年に続き、日本建築協会U-35委員会による展示企画とトーク企画を開催した。

展示企画ではこれまでに私たちが行ってきたtalk baton(インプットの活動)とaction(アウトプットの活動)を通して、そこで出会ったさまざまな建築とは異なるフィールドで活躍する同世代の人々とのディスカッションから得られた知見をパネル形式で展示した。また、昨年行われた日本建築協会100周年記念式典で開催した海外で活躍するU-35世代の方々を招いたシンポジウムの内容や、事前にU-35委員会で訪れた海外視察なども紹介し、来場された方々もその量に圧倒されながらも、とても熱心に見て頂くことができた。

トーク企画では、「設計者のしごと」一組織で働くU-35世代と建築—と題して、私たちU-35委員会のメンバーのうち、9名が自身の関わったプロジェクトについてプレゼンテーションを行った。

事前に委員会内でプレゼンテーションの内容について議論と練習を繰り返し行い、作品紹介に終わるのではなく、自分たちの仕事のプロセスや、設計に対する取り組み姿勢、建築に対する熱い思いを伝えることを重視し、私たち設計者の日頃の姿を具体的に知ってもらうことを強く意識した。

それぞれの建築に対するスタンスに合わせて『場所と建築』『プログラムと建築』『思いと建築』の3グループに分けてプレゼンテーションを行った。天気はあいにくの大雨(台風)であったが、トーク企画ではブース内に入れないほどの来場者があり、立見も発生するなど、前回以上の熱気の中でプレゼンテーションとディスカッション(質疑応答)を行った。

■ グループA『場所と建築』

- ・関村 光代(昭和設計) 「地域になじむ」
川西市市民体育館
- ・箕浦 浩樹(大林組)
「ここだけにしかない建築を創る」
Kプロジェクト
- ・宮武 慎一(安井建築設計事務所)
「“幸せな未来”を視覚化する」
hu+gMUSEUM

質問者(一般): 社会に出た始めのころは実務に追われてじっくり建築を考えている暇がなかったのですが、皆さんはどのように設計を進め、また上司とはどのように話をされているのかをお聞かせください。

関村: 私も実務にバタバタと追われてはいましたが、それでも比較的考える余地を上司に与えられた恵まれたプロジェクトだったと感じています。学生の時にやっていたことを活かして、提案し、技術的なことを教わりながら進めることができたと感じています。

質問者(学生): 私は高等学校の建築工学科で勉強しています。これから設計競技に参加したいと思っていますが、過去の受賞作品を見ると斬新な建物ばかりです。今の少子高齢社会の中ではアットホームな空間が一番良いと考えていますが、受賞するためだけの作品を作るべきか、自分の思っていることを貫くべきか迷っています。

宮武: 実務では長い期間そのプロジェクトと付き合う必要があります。納得のいかない設計をすると、その後何年も苦しむこととなるため、それだけはしないように心がけています。学生のコンペでも同様に、今の純真なピュアな気持ちを貫いた方が後々のためにもなるのではないかと思います。

■ グループB『プログラムと建築』

- ・鬼頭 朋宏(大成建設)
「コラボレーションにより最大化する建築」
アース環境サービス株式会社社都総合研究所T-CUBE



2016年に引き続き2回目のAAFとの共同企画



展示企画の様子



冒頭にU-35委員会の設立趣旨や取り組みを説明

・吉田 悠佑 (大林組) 「機能性能を乗り越える」
総合研究開発センター

・辻本 知夏 (安井建築設計事務所)

「個性を引き出すデザイン」

チュチュアンナグループ本社ビル

質問者 (一般)：辻本さんの作品は「カワイイ」をテーマにしていますが、デザインが決まっていく経緯を詳しく教えてください。

辻本：ガラスブロックの丸を8個並べるデザインはこちらからお客さんに提案しました。丸い窓を用いて外壁面に可愛らしさを表現しつつ、可愛いだけで飽きやすい絵にはならないようにバランスを考え、何パターンも作成して生み出しました。ファサードがめくれるデザインは繊維を扱う企業だったことから、可愛らしさと遊びを表現しました。実際に形にする時は技術的にも難しかったのですが、最終的に出来てよかったと思っています。

■ グループC 「思いと建築」

・小林 敬政 (大建設) 「思考を形にする」
K大学スポーツ施設

・平岡 翔太 (大建設) 「privateとpublicを繋ぐ」
某事務所

・森下 大右 (昭和設計) 「建築と僕」
永国寺キャンパス新図書館

質問者 (一般)：小林さんは入社2年目ということで世代が近く、親近感を持ってお話を聞いていました。プレゼンテーションでは、やりたいことのいくつかがクライアントとの協議の中で消されてしまい、残ったものをやりましたというふうに出てしまったのでもう少し詳しく教えてください。

小林：建築にはいくつかコンセプトがあり、最初にイメージしたことを踏まえてクライアントとのやり取りの中でそのコンセプトは取捨選択、精査されていくものだと思います。今回は、利用者が入ってみたいと思える北面のファサードが一番重要な部分だったため、このコンセプトだけは守り、あとは

利用者がいかに使いやすい体育館にできるかを考え、コンセプトを煮詰めていきました。

質問者 (学生)：森下さんのお話の中に「説明できる建築」という言葉がありましたが、例えば上司や専門家の方に説明する際と専門家ではない方たちに説明する際の違いがあれば教えてください。

森下：建築の専門家かそうでないかで計画の説明の仕方は大きく異なります。専門家の方の場合は、ある程度内容を省略しても問題ありませんが、専門家ではない方の場合には3Dを利用したり、分かりやすく丁寧な資料を準備します。また、相手が何に興味があるのか、例えばデザインなのかコストなのかを察知し、その人の興味のある分野・切り口で説明することが一番理解が早くなると考えます。

■ 全体ディスカッション

質問者 (一般)：2020年のオリンピック以降、恐らく日本の経済は衰退していくと考えています。35歳前後のみんなが5、6年後には40歳前後になり、これからもっと仕事をこなしていこうという時に自分が何をしたいのか、どういう部分を引き伸ばしていこうと考えているのか、そういうことを考えるきっかけがあれば教えてください。

宮武：まさにU-35委員会で議論していることです。僕たちは設計者の職能を広げることとはとても大切なことだと考えており、talk batonについて最初に説明させて頂いたとおり、同世代の建築関係ではない専門家の方たちとディスカッションをして視野を広げ、発見を得たりし、できることを増やすことも大切なことの一つだと考えて活動しています。

質問者 (一般)：知識知見を広げるのとあわせて、ビジネスとしても考えていく必要があると思います。建築設計者の高いヒアリング能力などを活かして地域に対して物事を解決し、対価を得ることを常々考えています。

(文責：宮武慎一、森下大右)

● U-35委員会企画「設計者のしごと」を終えて

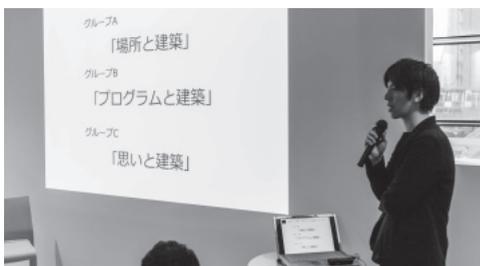
2年続けて参加させていただいた、AAF主催のこの企画はU-35委員会にとって、talk batonやactionと異なり、自分たちの「普段の仕事」を外部に対して発表する唯一の場だ。当初は組織で働く若手設計者の声に興味を高めしてくれる人がどのくらいいるのだろうかという不安もあったが、当日は立見が出るほどの多くの来場者、社会人や大学生だけでなく、高校生なども含む様々な世代の方に来ていただくことができた。発表の後、メンバーみんなが感じたことは、U-35委員会の活動が少しずつではあるけれど、着々と社会の中で認知されつつあるということ、同時に今年で6年目を迎えることとなるU-35委員会は次のステップ、社会に対してより強いメッセージを発信するステージに進んでいく必要があるということだ。

次年度以降もこのAAF主催の企画に参加させていただくことがあれば、前回・前々回を超える、社会に対する新たな発信を目指していきたいと考えている。

アンケートコメント欄の「現場の苦労や自身の建物への愛着が感じられてよかった」、「学生コンペに参加する際の心構えがわかった」、「設計者の個性と様々な要望とのせめぎ合いが知れた」、「知識が少なくともとても聞きやすかった」などの意見からは、単なるプロジェクト紹介にならず、設計者としての普段からの思いや振る舞いのようなものを素直に伝えたいというプレゼンテーションで意図した狙いがうまく伝わったのではと感じた。

今回初めて司会進行を務めることとなり、昼食が喉を通らないほどプレッシャーを感じた。なんとも小心者であると再認識したわけだが、つたない進行中、メンバーみんな協力して企画を成功させられたことにとても満足している。

(文責：宮武慎一)



登壇者の思考に沿ってグループごとに発表を行った



来場者との距離が近く白熱したディスカッションが展開



U-35委員会メンバー